

スリー・パーダ (Sri Pada) に関する諸信仰と観光

粟津原 淳

Beliefs and Tourism of Sri Pada, a Holy Mountain in Sri Lanka

AWAZUHARA Atsushi

要 旨

スリー・パーダ (英語名 Adam's Peak) は、仏教、ヒンドゥー、キリスト、イスラム教が共存するスリランカにおいて人々の共通した聖地となっており、その山と山頂に続く道は、どの信徒にとっても大切な巡礼地となっている。

本稿ではその山岳信仰の根底にある原始宗教の存在を指摘し、各宗教がその伝承をどのように取り入れているかを概観する。スリー・パーダに纏わる様々な伝説もまた、この山が宗教の違いを超えた共通の巡礼地となっていることに寄与している。

「聖地」とは、本来は宗教的な意味合いで使われる用語であるが、近年は必ずしも信仰とは関わりのない人々にとっての観光対象ともなっている。2010年に世界遺産の一つと制定されて以降、スリー・パーダは魅力的な「聖地」として人気を集めているが、異邦人たる旅人と現地の慣習との間にある差異が生む問題についても考察する。

キーワード：多宗教、伝説、巡礼、聖地、ツーリズム

はじめに

スリランカ南部のサバラガムワ州に、三角錐の形をして聳え立つスリー・パーダと呼ばれる山がある。標高2243メートルのこの山は、英語名でアダムズ・ピーク (Adam's Peak) とも呼ばれ、多宗教が共存するスリランカにおいて人々の共通した聖地となっている。12月の満月の日 Unduwap Poya (ブッダガヤの菩提樹の分木をアヌラダープラに運んだアショカ王の娘サンガミッタの到来を祝う日) から、5月の満月の日 Vesak Poya (仏陀誕生を祝う日) の巡礼期間には、仏教徒をはじめ、ヒンドゥー、キリスト、イスラム教徒の人々が、各々の信仰にとって大切な聖地としてスリランカ各地から集まってくる。

スリー・パーダとはサンスクリット語で「聖なる足跡」を意味する。山頂には1.5メートル大の足型に見えるくぼみがついた岩があって、仏教徒にとってそれは仏陀の足跡であり、ヒン

ドゥー教徒にとってはシヴァ神の足跡であり、イスラム教徒はアダムの足跡、キリスト教徒はアダム及びイエスの弟子トマスが残した足跡と信じている。その山と山頂に続く道は、各信仰共通の巡礼地となっている。この山はまた、スリランカの四大河川の水源地となっており、農耕や自然の恵みを育む聖山としての一面もある。

シンハラ語ではこの山をサマナラ・カンダ（サマン神の頂）と呼ぶ¹。サマンは狩猟を主とする先住民ウェーダ族の守護神であった可能性があるが、仏教やヒンドゥー教がスリランカで受容されていく過程の中で、各々の信仰に組み込まれていった。サマナラはシンハラ語で蝶々（サマナラヤ）も意味する。

足型がついた岩は19世紀の時点で、真鍮とサファイヤなどの宝石で出来た枠で囲われていたという²。現在は足型の上に板石がかけられ、さらにその板を守るように仏教寺院が建てられており、一般の来訪者が足型を直接見ることはできない。山頂にはサマン神の祠も併設されている。

スリー・パーダとその周辺は、2010年に「スリランカの中央高地」としてホートン・プレインズ国立公園とともに世界自然遺産に登録された。筆者は翌年12月にスリー・パーダを訪れた。近年、この山は巡礼者にとってのみでなく、観光資源のひとつとしてスリランカ内外の人々から注目されている。イギリスのガイドブック出版社 Lonely Planet は、訪れたい世界の10大聖地のひとつとしてスリー・パーダを紹介していて³、今後も海外からの観光客の増加が予想される。観光客にとってスリー・パーダは信仰の山というよりも、単に有名な地であったり、スポーツ登山のためには格好の地であったりといった、宗教や巡礼とは必ずしも結びついていない捉え方も見受けられる。

本稿では、スリー・パーダに纏わる様々な伝説を紹介しながら、この山がスリランカの人々にとって、宗教の違いを超えた共通の巡礼地であることを示したい。また、巡礼とツーリズムの観点から、観光客と聖地の接点について筆者の私的な経験を踏まえて論考したい。

1. 巡 礼

山頂へ続く巡礼道には、ラトゥナプラ（Ratnapura）から通じるババ（アダム）・ルートとマスケリヤ（Maskeliya）からダルハウス（Dalhousie）へと入るママ（イブ）・ルートがある。ママ・ルートは比較的なだらかな参詣路であるが、このルートのみを使って登る者は巡礼の道半ばとみなされている。ババ・ルートを登ってこそ、スリー・パーダ巡礼を全うしたと言われる。なお、ママ・ルートの階段入り口付近には日本山妙法寺が建てられている。

ババ・ルートは険しい岩山に杭と鎖が打ち込まれるなどして、参拝道が整備されていった。

記録に残る最古の整備はパラクラマバーフ2世 (1250-1284 C.E.) の時代までさかのぼり、命綱となる鎖の10番目は「信仰告白の鎖」と呼ばれている⁴。参拝者がその場に到着し足元を見下ろしたとき、落下の恐怖に襲われて必死に祈るからだといわれている。

Jayatilakeは参拝のマナーのひとつとして、登っている際に山頂まで掛かる時間を巡礼者は尋ねてはならないと述べている⁵。道で巡礼者同士が会ったときには、「カルナワイ (平和、あるいは、ご慈悲がありますように)」と挨拶しあい、疲れを癒すために民謡を歌うこともあるという。巡礼者たちは山頂に到着すると、鐘を今までに訪れた回数分鳴らすのが慣わしとされている。ただし、初登頂者は家にたどり着いて初めて巡礼が完了するので、その鐘を鳴らすことはできない⁶。

一般的に、人々は夜の間山頂に到着してそこで一夜を過ごすか、朝日に間に合うように午前2時頃から登り始める。日中は暑さで登るのが大変な事も、夜に登山する理由のひとつである。ガイドブックではママ・ルートの場合、麓から山頂まで2時間から4時間位が登頂にかかる時間の目安とされている。現在では参道は階段になっており、両脇の電灯と所々にある茶屋の明かりを頼りに、暗がりの中を進みながら山頂を目指すこととなる。筆者はママ・ルートを歩いたが、登り当初は緩やかな坂と階段が続いたものの、途中からはだんだんと階段が急になっていって、山頂に近づく頃には一つ一つの石段が高いせいで真っ直ぐに進むことが出来ず、階段をジグザグ状に斜めに歩かないと上がれない状態となった。道中は老若男女、なかには子供を背負いながら登っている巡礼者にも出会ったが、簡単だといわれるママ・ルートであっても、山頂までたどり着くには体力がいる。道の途中には五ヶ所の休憩所があって、疲れと渴きを癒しながら、それぞれのペースで巡礼者や登山者は山頂を目指す。

道の途中には、涅槃仏とヒンドューのガネーシャ神と一緒に祀った祠もあって、両信仰の共生を見ることができる (図1)。イディカトゥパーナと呼ばれる場所には糸巻きの糸が参道脇にかけられているが (図2)、これは仏陀がこの場所で立ち止まって、衣のほころびを縫ったことに由来すると言われている⁷。

山頂では朝になって太陽から光が差し込むと、巡礼者は東を向いて御来光を拜む。一方、西側の眼下に広がる雲海には、ピラミッド型の山影がくっきりと映し出される (図3)。光と影が作り出すその光景は神々しくもあり、その美しさは巡礼者ばかりでなく、スポーツのつもりで登ってきた観光客をも魅了する。

その後山頂の仏教寺院では、毎朝麓から上がってくる僧侶によって祭儀が執り行われ、仏教徒の巡礼者たちは祈りの時を守る。ヒンドューのブラフマンの司祭が供物を捧げて供養することもある。



図1 ガネーシャ神（左）と涅槃仏（右）



図2 イディカトゥパーナ

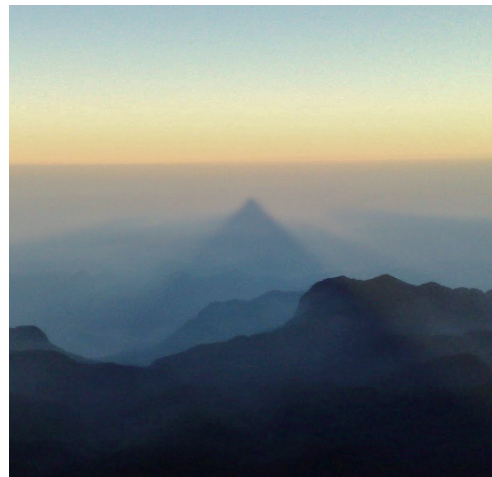


図3 雲海に映るスリー・バーダ影

2. 伝説・歴史

(1) 仏教

聖なる足跡の起源については、各々の信仰によって諸説ある。仏陀の足跡が残るとされてい

る山への信仰は、島とスリランカの仏教を守る4守護神のうちの一人マハ・スマナ・サマン神の伝説を伴っている。Palihapitiyaはその伝説を次のように記している：

仏陀が1回目のスリランカ訪問のとき、彼は生きとし生けるあらゆるものに教えを説いていた。サマン王子はその教えを受けた一人であり、王子はニルヴァーナの道を追求め、祭儀も熱心に学ぼうとした。仏陀はサマン王子に仏陀自身の頭から抜いた髪の毛の束を授け、その髪はマヒヤンガナ⁸に建てられた寺にある祠に収められた。その後、仏陀が三度目に島を訪れたとき、サマン王子の願いを聞き入れて、仏陀は聖なる山の頂に彼の足跡を残したという。王子は死後マハ・スマナ・サマン神となり、島とスリランカの仏教を守る4守護神のうちの一人だと信じられている。ラトゥナブラとマヒヤンガナには、マハ・スマナ・サマンを祭る寺が建立された⁹。

ここでは、仏陀がスリランカへやってきたことが歴史的な事実かどうかは問題とされていない。重要なのは、聖なる足跡は仏陀によって直接付けられたという起源を語る伝承と、かつての王室の人物の一人が仏陀の弟子となり、後にスリランカ仏教の守護神となったという信仰で、これらの伝説のゆえに、スリー・パーダは最も重要な聖地のひとつとスリランカの仏教徒にみなされている。サマン神が仏陀に帰依したという伝承は、土地神であり先住民の守護神サマンが仏教に組み入れられていく過程で生まれたのかもしれない。

(2) ヒンドュー

一方、ヒンドューでスリー・パーダは「シヴァノリパーダム」や「天への道」と呼ばれ、世界創造のためにシヴァがダンスをしたときにつけた足跡と信じられているが、シヴァ神とスリー・パーダが結びついたのは16世紀後半以降といわれている¹⁰。

仏教で仏陀の弟子となったサマンは、ヒンドューでは『ラーマヤナ』に登場するラーマの兄弟ラクシュマナとみなされている¹¹。『ラーマヤナ』第四巻には、スリランカを拠点とする魔王ラーヴァナによって誘拐されたシータを助けるために、ラーマがラクシュマナとハマヌーンの軍隊とともにスリランカへ侵略する様子が語られるが、ヒンドュー教が浸透していく中で『ラーマヤナ』が現地化して、サマン信仰との混合が生まれたようである。サマン（サマンサアクティとも呼ばれる）はラーヴァナの死後、スリランカの南と西の地域を統治したといわれる。仏教徒、ヒンドュー教徒どちらにもサマン神はスリー・パーダの守護神であるが、その伝説はそれぞれの信仰と関連付ける形で保持されている。

(3) サマン神

仏教やヒンドゥー教に取り入れられる以前のサマンは、もともと大地や山の神であった可能性が高い。Nitzsche は彼自身が巡礼した際、70代の女性が「カルナワイ、カルナワイ」と挨拶するほかに、「サマン デヴィンドゥ アピ エナヴァ (サマン神よ、私たちはあなたの元へとやってきました)」と唱えながら山を登っていたことを報告している¹²。

ウェッダー族はこの山をスマナ・クータと呼び、スリー・パーダはもともと先住民にとっての山岳信仰の地であった。仏教が紀元前246年にスリランカへ伝わると、サマン信仰は仏教へと吸収されて、サマン神は仏陀を守護する一人となっていった¹³。その後、サマン信仰はヒンドゥーにも取り入れられていく。

スリー・パーダでは9月頃になると、何百万もの蝶々があらゆる方角から集まってくる現象が見られるが、人々はこれを「サマナラヨ」と呼んでいる¹⁴。鈴木は、サマナラヨとは土地の人々にとって死者の靈魂を意味し、山の死霊であると指摘している¹⁵。山は霊となった祖先が集まる場とする先住民の考えが、土地神サマンと山岳信仰としてのスリー・パーダとの関係性に反映しているのかもしれない。

ババ・ルートの出発地ラトゥナプラの近くにある寺院マハー・サマン・ディヴァレでは、古来よりサマン神が祭られているが、公式では13世紀の建立となっていて、現在では仏教寺院の敷地内にある。Nitzsche はカプララと呼ばれているこの寺院の僧たちはヒンドゥーのブラフマンでも仏教僧でもないとする¹⁶。一方、渋谷はヴィシュヌ神を奉じてきたブラフマンが神職を代々受け継ぐとしている¹⁷。この地はスリランカへ両宗教が入ってくる以前からの信仰の場であり、現在でも神職は世襲制である。

スリー・パーダと並んでスリランカで重要とされる聖地カタラガマ (Kataragama) には、ヒンドゥー、仏教、イスラムによって、同じ敷地内に各寺院が建立されている。このヒンドゥー寺院マハー・ディヴァレ (カタラガマ神殿) の最高指導者マータラ・サーミー師は、「スリランカ人の信仰の基底には、すべてを生み出す大地や自然への信仰があって、それを土台に各宗教が成り立っている。だから宗教が違って、同じ敷地内でそれぞれが信ずる神へ祈りを捧げることへの抵抗がない」と話していた¹⁸。仏教・ヒンドゥー両信仰によるサマン神伝説と、4宗教によるスリー・パーダ信仰の根底には、スリランカ人に古代から伝わる信仰が影響しているようである。

(4) キリスト教

スリランカのキリスト教徒の間では、聖なる足跡はアダムと関連付けられている。アダムがエデンの園を追放されて、最初に地上で足を付けたのがスリー・パーダの頂であり、アダムは

禁断の果物を食べた罪を贖うため、1千年の間その山頂に片足をつけたまま留まったという伝説が信じられている¹⁹。

ポルトガル人が1505年にスリランカへやってきたときにはスリー・パーダを Pico de Adam と呼んだが、彼らがやってきた際には、イエスの弟子トマスがインドやスリランカでキリスト教の布教活動をした後、スリー・パーダに足を掛けてから天に昇っていったという話が広まっていたという²⁰。

南インドやスリランカのキリスト教界では、トマス行伝（新約聖書外典）に書かれているように、トマスがインドへやってきてキリスト教を伝えたという伝承が受け入れられており、南インドのケララ州を中心にトマス派クリスチャンあるいは Nasrani と呼ばれる独自の教会が形成されている。1653年のコーナン十字の誓い²¹以降に共同体は徐々に分派し、現在は7教派に分かれている²²。トマス派はペルシャのネストリウス派やシリア派教会がインドへ伝わったものと言われているが、Nasrani Foundation ではトマスのインド来訪を教会の起源と定めている。

(5) イスラム

イスラム教徒の間でも、アダムが失楽園の後1千年間スリー・パーダの頂に立っていたと伝えられており、それ故にスリランカは天に最も近い所と言われている²³。

かつて、アラブ地域から宝石やスパイスなどの貿易のためにスリランカへと海を渡ってやってくる商人にとって、スリー・パーダは島に近づいたことを知らせるためのかっこうの目印となっていた。14世紀のモロッコ商人・旅行家の一人イブン・バトゥータは、海上からは島に着く9日前からスリー・パーダが見えていたと記している²⁴。また彼らは、山頂にはアダムの足跡が残っているとの話を以前より聞いていた。バトゥータは寄港地の君主と接見した際に望みを聞かれ、「神聖なる足跡、アダムの足跡を参拝したい。」と答えている²⁵。

バトゥータは、ペルシャのシーラーズで聖人イマーム＝アブ・アブド・アッラー・ブン・ハフィーフ²⁶ (882-982C.E.)、通称シャイフの霊廟を訪れているが、シャイフがスリー・パーダを訪れた最初のムスリムだと報告している²⁷。シャイフはスリー・パーダに登る途中、仲間のうちで一人だけ子象を食べることを拒んだことで、その後の象たちの襲撃から助かった。さらに、リーダーの象がシャイフを背中に乗せて人里に現れたため、村の人々から霊験あらたかな人物と見なされるようになった。それまでイスラム教徒はスリー・パーダに近づくことを住民から拒否されていたが、以後イスラム教徒たちはスリランカで高く尊敬され、家族同様の扱いを受けるようになったと伝えられている²⁸。

シャイフ以前にも、850年にアラブ商人がスリー・パーダ巡礼を行ったという報告もある²⁹。また、1282年に死去したアル・カズウィニが引用した『ムハンマド言行録』には、「駱駝が跪く

のに最も適した地はメッカ、そのあとはメディナのモスクとエルサレムのアル＝アクサ・モスク、そして我らの父アダムが降り立ったサランディブ（スリランカ）である」と記されていると伝えられている³⁰。

スリー・パーダ周辺ではサファイヤ、ルビー、トパーズなど、様々な宝石類が豊富に産出するが、アラブの人々の間では、失樂園の際にアダムとイブが流したクリスタルの涙がこの地に落ちて宝石になったと伝えられている³¹。宝石と並んでこの地で豊富に採取されるスパイス類も、アダムが樂園から持ってきたものだと伝えられ、14世紀のペルシャの詩人は、アッラーがスリランカ中のスパイスと花々を創造したがゆえに、アダムとイブは樂園から追放されても耐え忍ぶことができたと言っている³²。

アダム神話とムハンマドの言葉によって、スリー・パーダは聖なる山としての神秘性が強調されて、スリランカを行き交うイスラム教徒の信仰に深く根付いていたようである。ちなみに現在でも、かつてのアラブ貿易の港があった島の西から南にかけての地域にはイスラム教徒が多く住み、各町にはモスクが建立されている。島の南にある町ゴール（ガッラ Galle）には、イスラムを学ぶアラビア語の大学もある。

(6) 王朝とスリー・パーダ

聖なる足跡は、スリランカの歴代王朝と深い関わりを持つと信じられている。Nanayakkaraによると、紀元前140年にマハワムサ朝のドゥツウゲムヌ王の最期を看取った僧侶の一人が、王から寄進された粥を人々に分け与え、サマン神の山に居を構えたといわれており³³、その時点ですでにスリー・パーダは信仰対象の聖山とされていたことが伺える。

さらに、聖なる足跡を最初に見つけたのはヴェアラガムバフ（別名ワッタガーミニ・アバヤ）王（104-76 B.C.）だとする伝承では、南インドの王国チョーラ朝の追跡を逃れて、王が山の奥へ逃げ込んだのがその発見のきっかけだったと言われている³⁴。彼は雄鹿に姿を変えた一人の神によって、スリー・パーダの山頂へと導かれ、そのとき聖なる足跡を発見したのだという。その後、一般の人々ばかりでなく、歴代王朝にとってもスリー・パーダ巡礼は重要な行為となったと伝えられている。

文献上、初めてこの山が登場するのは、6世紀初頭に僧侶のマハーナーマによって編纂されたとされる編年王統譜『マハーワンサ』で、パーリー語でスマナクタータ（スマナ神の峰）と記されている³⁵。鈴木によると、スリー・パーダ山と仏足石の伝承は、『マハーワンサ』上で創られた可能性が高く、当時のシンハラ王権の庇護を受けた仏教僧侶が、民間伝承を仏教と接合していった可能性がある³⁶。

一方 Palihapitiya によると、聖なる足跡と王権との関係に言及する文書がウイジャヤバーフ王

の時代 (1065–1119 C.E.) に書かれており、王の命によって、スリー・パーダまでの巡礼道に休息所がいくつか設置されたことが記されている³⁷。その後ニッサンカマツラ王 (1198–1206 C.E.) は、彼の軍隊と共に登頂して足跡を参拝し、足跡を保護するために石製の厚板で囲いを建設したと伝えられている。パラークラマバーフ 2 世 (1250–1284 C.E.) は、山頂のサマン神祠の設置や、山頂までのジャングルを整地して道と橋を敷設している。この後も、歴代王朝によってたびたび山頂及び参道が整備されており、長年にわたってスリランカの国家運営のなかで、スリー・パーダ巡礼が重要なプロジェクトのひとつと考えられていたことが伺える。

一方、ヴェデハという13世紀の僧によって書かれたパーリー語の詩「サマンサ・クタ・ヴァンアマ」には、その時代の一般のシンハラ人の仏教徒たちの間で、聖なる足跡の信仰が高まっていたことが伝えられている³⁸。

(7) 歴史上の人物による登頂伝説

スリー・パーダに纏わる伝説には、王や一般のスリランカ人の巡礼のみならず、歴史上の人物も登場する。その登場人物たちは、ヨーロッパから中国へかけての広範囲にわたる。

史実ではインド西部まで遠征したと言われているアレクサンドロス 3 世だが、伝説ではその地をはるかに超えてスリランカへと上陸し、紀元前324年にはスリー・パーダにも登頂しているとされている。15世紀のベルシャ詩人アシュラフが残した“Zaffer Namah Skendari”によると、アレクサンドロス大王はインド遠征の際に、南西部まで軍団を進めた後、さらに南へと進軍した。初期ギリシャ人にタップロボンと知られていたスリランカを探求するためである³⁹。Nanayakkara によると、彼が島に来訪した理由は、その地にそびえ立つスリー・パーダとヒンドゥーのサマン神に惹かれたためと言われている⁴⁰。

イブン・バトゥータの『大旅行記』でも、アレクサンドロス 3 世はスリー・パーダに登頂したとされている。アラビア語の『大旅行記』の中で、スリー・パーダの麓には‘Iskandar’ (アレクサンドロス大王) に由来する岩屋と泉池があると記されているが、Nanayakkara によれば‘Iskandar’はベルシャ詩人アシュラフが記した‘Skendari’を指す⁴¹。

スリー・パーダに関するアレクサンドロス大王伝説は、その出処はいずれもムスリムやアラブ地域の旅人からのものとなっている。その地域で語られるアレクサンドロス 3 世に対する英雄像がスリランカへ伝わると、島で最も偉大な山と言われるスリー・パーダと結びつき、アレクサンドロス大王のスリー・パーダ登頂伝説が生まれたのではないだろうか。

海上交易路が発達するにつれて、様々な地域の仏教僧や商人、探検家等がスリランカを訪れている。東晋時代の僧である法顕は、411年から2年にかけてスリランカに滞在しており、その著書『仏国記』の中で、ブッダが島の北にある王都アヌラダープラに足を着き、もう片方の足

をスリー・パーダに降ろして山頂に足跡を残したと記している⁴²。ただし、法顕自身がスリー・パーダを訪れたかは定かではない。

インド人僧ブンヨパヤは655年に中国へ赴く途中で、スリー・パーダに登ったとされている。同じ頃にカシミール僧のバジュラボディは、数ヶ月間スリランカに滞在し、スリー・パーダ山頂からの壮大な眺めと仏陀の足跡に感銘を受けたと伝えられている⁴³。

マルコ・ポーロも、聖なる足跡の伝説に登場する著名人のひとりである。彼は中国からの帰途スリランカを訪れたといわれているが、『東方見聞録』によれば地元民からアダムズ・ピークの頂上にはアダムの墓、あるいはブッダの墓があると聞いている⁴⁴。マルコ・ポーロは頂上にはブッダの毛髪と歯と彼が用いた皿が残っていると語るが、それらはアダムのものであるとも語っている。フビライ・ハーンはアダムの聖遺物を手に入れるために使節を送ったとも記されている。一方でスリランカには、マルコ・ポーロ自身が崖から足を踏み外しそうになりながらも、険しい道を山頂へと登っていった伝承が残っている⁴⁵。

プトレマイオスの『地理学』には、スリランカの地図上にスリー・パーダを含めた南部の山々が記されているが⁴⁶、13世紀のイタリア・ボルデノーネの探検家オドリックや、14世紀のフランチェスコ派修道士ジョヴァンニ・デ・マリニョーリはスリー・パーダに登ったといわれており⁴⁷、ヨーロッパ世界においても聖なる足跡はその存在が古くから知られていたとみられる。

明代の武将である鄭和は、船団を率いて東南アジア、インドからアラビア半島、アフリカにまで航海しているが、1411年に島の西南部にあるゴール港に立ち寄って、膨大な金銀財宝をスリー・パーダのために寄進している⁴⁸。

1423年には、仏典研究と収集のためにタイとカンボジアから訪れていた僧侶たちがスリー・パーダに登っている。リーダーの僧は仏陀の足型を写し取り、タイへ持ち帰ったと伝えられている⁴⁹。

南インドからはトマス派クリスチャンが巡礼に訪れ、スリランカがポルトガルに占領されてシンハラ人が強制的にカトリックに改宗されると、彼らもスリー・パーダ巡礼に加わることになる⁵⁰。その後、ポルトガル人やオランダ人、イギリス人など、島を植民地化した西洋諸国からの登山者が増えていく。17世紀におけるオランダ人のインド洋海域における活動を記した記録には、F. ヴァレンティンによるアダムズ・ピーク図が載っている⁵¹。

いわゆる海のシルクロード上にあるスリランカは、古来よりアラブ、アフリカ、地中海地域と、インドや中国、東南アジアを結ぶ東西の重要な海路上にあり、宝石やスパイス等を求めた船が行き交い、国際的な貿易の地となっていた。独特な三角錐状のスリー・パーダは、スリランカに近づく海上の船からも容易に見えてきたであろうし、陸地に近いことのサインとなっていたであろう。船乗りや海上商人にとって、この山は航海安全を祈る聖山ともなっていたよう

である⁵²。スリー・パーダの存在や山頂の足跡に纏わる伝説は、インド洋を行き交った人々によって、様々な地域に伝播していったと想像できる。

(8) 文学に登場するスリー・パーダ

スリー・パーダの偉大さや美しさを綴った文学作品は数多く、その作品を読んだ人々に、スリー・パーダへの浪漫と神秘を掻き立てるには十分な役割を果たしていると考えられる。Dhammika が紹介している作品群によると⁵³、13世紀の詩人ヴェヘダ・テラはパーリー語でスリー・パーダの特別な美しさを語り、15世紀の詩人サラリヒニ・サンデサはシンハラ語でスリー・パーダを称え、16世紀のシンハラ詩人スユル・サンデサは、サマン神がスリランカと王を守っていることに感謝を捧げている。

Dhammikaによれば、インド大陸の文学にもスリー・パーダはしばしば登場する。『ラーマヤナ』を元にして9世紀に書かれた『アナルガーラガーヴァ』では、空飛ぶ戦車に乗ったラーマが同乗していたシータにむかって、青く輝く海に浮かぶスリランカと宝石の山スリー・パーダを指差す場面や、11世紀にカシミールで書かれた『ラジャタタラガニ』では、神話的な王メガヤハナがスリランカへやってきて、鬼神ラクシャサの長ヴィブヒサナから丁重に迎えられ、その後スリー・パーダに登ったと記されている。タミール語の叙事詩『マニメケラ』では、サマン神の山、仏陀の足跡が残る山、そして命をかけて海を渡った旅人が目指したスリー・パーダの偉大さを語る。マレー語版の『ラーマヤナ』でも聖なる山スリー・パーダが語られている。

さらに『千一夜物語』第310夜では、シンドバットはセレンディブ島（スリランカ）の王と謁見したときに、島にある地上最高の山の頂にはアダムがしばらく住んでいたという話を聞いている⁵⁴。最近ではアーサー・C. クラークがスリー・パーダを舞台として『楽園の泉』を描いている。

3. 聖地巡礼とツーリズム

スリランカ国内のみならず海外においても、スリー・パーダの聖性や美しさ、その神秘性が歴史上の人物や文学作品等を通して広く知られることとなり、この山は過去から現在に至るまで多くの人々を惹きつけている。1989年からスリランカ政府と「タミル・イーラム解放のトラ」の間で繰り広げられていた内戦が2009年に終結し、観光は国の再建と外貨を獲得するための重要な産業となっていて、スリー・パーダは外国人に対してスリランカの魅力をアピールするための重要なシンボルの一つとなっている。2010年には「スリランカの中央高地」として世界遺産にも登録された。筆者が訪れた2011年12月末には、巡礼期間が始まっていることもあって多

くのスリランカ人が山を登っていたが、それに混じって数多くの観光客が各地から訪れていた。山頂の狭いスペースには、カメラやビデオを手にした外国人旅行者が朝日を見るために集まって場所取りで鯨詰め状態となり、一方巡礼者たちは、一段下にある小屋やその周辺で静かに夜が明けるのを待っていたのが印象的だった。

もともとあらゆる信仰に対して開かれている山とあって、外国人がスリー・パーダに登ることには表面上、地元の人々の反感や反発は感じられない。それどころか人々はとても親切で、降りる際に途中で一緒になったタミール人家族からは、ぜひ昼食を我が家に来て食べなさいと誘っていただいたほどである。人々の間には、他者に対して善行を施すことで徳を積むといった意識があるせいか、あちこちで一外国人旅行者の筆者にとっても暖かく接してくれたのが印象的だった。

海外から聖地を訪れる人々にとって、その動機や目的は様々であろう。山中は『宗教とツーリズム』の中で、宗教を人間の意識のあり方で捉える機能主義的な立場をとるエリック・コーエンを紹介し、人々のいづく旅に対する意識を五つの様態に区別する：1. レクリエーション・モード（娯楽、体力・気力の回復）、2. 気晴らしモード（日常からの逃避）、3. 経験モード（他者の生活の真正性の体験、好奇心）、4. 実験モード（求道者タイプ。ただし全面的にはコミットしない）、5. 実存モード（自分が選んだ中心に真の意味を見出すための旅と日常生活との二つの世界に生きる）⁵⁵。これらの様態においては、必ずしも既存の宗教や信仰を動機としない、個人のスピリチュアルの追及も研究対象に入ってくる。旅人にとって1から5の分類は必ずしも固定されるものではなく、レクリエーションのつもりで訪れながらも求道心が芽生えることもあるであろうし、旅から帰ってみると、実存モードが醒めて日常に埋没することもあるであろう。いずれにしても、一般的に旅は一定期間（長さに関係なく）、他者の世界へ入って行って、やがて戻ってくるのが前提となっており、どの様態であっても聖地の人々にとって旅人は異邦人であることに変わりはない。

異邦人たる旅人が、自分自身の世界や価値観をそのまま聖地に持ち込むときに、当地の人々と軋轢を生むことがある。スリランカのケースでは2012年8月に、仏像にキスをして写真を撮ったフランス人女性が不敬罪で逮捕起訴されている⁵⁶。過去にも仏像に抱きついた外国人女性が逮捕されている。スリランカでは写真を撮る際に、仏像にお尻を向けるのも不敬と咎められるほどである。当の本人にとっては悪気がないにせよ、訪問地の人々にとっては冒瀆的行為と受け止められることもある。外国人にとっては取るに足らないように思える行為も、信仰者にとっては大きな侮辱と受け止められることは世界の各地で度々見受けられるが、スリランカにおいても同様なことが起きている。

スリランカでは、日常生活と信仰生活は分離していないので、聖地や宗教施設の外でも、旅

人は異邦性・他者性と出会うケースが見受けられる。たとえばバスに乗ると、運転手の後方は僧侶席となっていて、僧侶が乗車してきた場合は席を譲るのが暗黙のルールとなっている。隣の席に座るのは禁止ではないが、成人女性は衣に触れることもタブーとされているので、その席の列に女性が座ることはほとんどない。寺戸は「わたしたちの場所」ではないところに行くときに「観光らしさ」が増すと書いているが⁵⁷、訪問地の日常生活の中にある他者性・異邦性は、結果として旅の郷愁をより一層誘うことになっているのかもしれない。

聖地の世界遺産化は、その文化的、商業的価値の国際化を加速させる。その名が世界中に知られるようになると、聖地とその周辺には大きな経済的効果をもたらされるが、その一方で聖地の商品化の課題が持ち上がる。聖地は本来、「場所」、「伝承」、「行為」、「信仰」、「人」が有機的に繋がって、宗教としての意味づけが与えられているが、観光化によって経済的に利用されるようになると、聖地は断片化されて消費の対象となり、本来の意味づけとは異なる価値が付与されていく可能性がある。「仏像にキスをして写真を撮る」行為は、信仰者にとっては冒瀆でも、モノ化した対象物（例えば、ご当地キャラクターや着ぐるみなど）と気軽に写真をとる行為は、観光の場ではよく見られる光景である。

スリー・パダと並ぶ聖地カタラガマの周辺では、経済活動が活発に行われている。神殿を中心に門前町を形成し、宗教行事や巡礼に関わる商業施設のみならず、カタラガマとその周辺の町にはインターネット・カフェやアーユルヴェーダ・マッサージ施設のような、必ずしも巡礼者ばかりでなく観光客をも対象とした施設が見られる。宿泊施設も数多く、主要な交通手段のバス網は近郊の町を始めとして、コロンボやゴールのような遠方の都市とも繋がっていて、巡礼者にとっても観光客にとっても訪れやすい環境を人為的に作り上げている。

筆者が訪れた2011年12月末の時点では、カタラガマに比べるとママ・ルートの入り口にあるマスケリヤやダルハウスといった町は観光化の影響はさほど受けていない印象であった。ダルハウスはスリー・パダの来訪者を対象に作られているが、宿泊施設は個人客対象のゲストハウスが大半で、数も10件弱のこぢんまりとした村であった。交通手段はあまり発達しておらず、鉄道駅のある近郊の町ハットンからのバスは、1時間に1、2本程度である。参道入口には軽食や土産を扱う店が並んではいるが、それほど活発な印象はなく、田舎の素朴な門前町の風情といった感があった。

しかしスリー・パダを初め、周辺の自然環境は観光資源として十分な価値を有しており、大規模開発によるリゾート化の可能性は十分にある。2023年8月時点で Google map で検索すると、ダルハウスではゲストハウスから高級ホテルまで15件以上の宿がインターネット経由で予約できる状態となっている⁵⁸。

観光化は聖地本来の持つ意味を失いかねないマイナス面もあるが、周辺の人々にとっては経

済的恩恵を生むプラス面もある。また、様々な場所から訪れる人々によって、スリー・パーダに新たな伝承や意味づけが付け加えられることもあろう。そもそもスリー・パーダは、古来より多くの人々を惹きつけて、各地に伝説と共にその存在が伝わっていったことを考えれば、今もなお巡礼を核としながら、新たな物語や伝説を作り出す聖地なのではないだろうか。

注

- ¹ *Sri Pada or Adam's Peak: Lanka's Holy Mountain.*
- ² Jayatilake, Rajika. "Sri Pada: Symbol of Inter-faith Harmony."
- ³ *lonely planet* 28 June 2012.
- ⁴ "Adam's Peak: Its History." イブン・バットゥータ『大旅行記6』293頁。
- ⁵ "Sri Pada: Symbol of Inter-faith Harmony."
- ⁶ ハインド, レベッカ『図説 聖地への旅』117頁。
- ⁷ 同上 117頁。
- ⁸ 仏陀がスリランカで最初に訪問した地。仏陀の死後に鎖骨が収められた仏塔もあって、仏陀の遺物が二つある聖地。
- ⁹ Palihapitiya, P. G. G. "Sri Pada: An Historical Account."
- ¹⁰ 鈴木正崇「スリランカの聖地と巡礼—スリー・パーダを中心として」184頁。
- ¹¹ Boyle, Richard. "Saman's Realm."
- ¹² Nietzsche, Goetz. "Visiting a God."
- ¹³ Dhammika, Ven. S. "Sri Pada—Buddhism's Most Sacred Mountain."
- ¹⁴ 同上
- ¹⁵ 鈴木正崇「スリランカの聖地と巡礼—スリー・パーダを中心として」179頁。
- ¹⁶ Nietzsche, Goetz. "Visiting a God."
- ¹⁷ 渋谷利雄「スリランカの仏教とナショナリズム—ラトゥナプラのエザラ・ペラヘラ祭を中心に」305頁。
- ¹⁸ 個人的インタビュー, 2012年1月3日。
- ¹⁹ Ratnasinghe, Aryadasa. "Sri Pada: Shrouded in Legend and History."
- ²⁰ 同上
- ²¹ ポルトガルによる信仰・日常生活の両面支配に対する不服従宣言。
- ²² *Nasrani Foundation* を参照のこと。1661年にカルメル会が東シリア派教会を設立し、ローマ・カトリックヘトマス派の84教会を統合。他の32教会はシリア正教会に統合される。その後、両教派ともさらに分派していく。
- ²³ "Islamic Traditions of Adam's Peak."
- ²⁴ イブン・バットゥータ『大旅行記6』292頁。
- ²⁵ イブン・バットゥータ『大旅行記6』284頁。
- ²⁶ 初期のスーフィズム思想家。
- ²⁷ イブン・バットゥータ『大旅行記2』338頁。
- ²⁸ 同上339頁, 『大旅行記6』286頁。
- ²⁹ Dhammika, Ven. S. "Sri Pada—Buddhism's Most Sacred Mountain."
- ³⁰ 同上
- ³¹ 同上
- ³² 同上

- ³³ Nanayakkara, S. S. M. "Sri Pada: Sanctuary for All Faiths."
³⁴ 同上
³⁵ 鈴木正崇「スリランカの聖地と巡礼—スリー・パーダを中心として」175頁。
³⁶ 同上177頁。
³⁷ Palihapitiya, P. G. G. "Sri Pada: An Historical Account."
³⁸ 同上
³⁹ "Adam's Peak: Its History." by The Living Heritage Trust.
⁴⁰ Nanayakkara, S. S. M. "Visit of Alexander the Great to the Sacred Mount of Sri Pada: Fact or Fiction?"
⁴¹ 同上
⁴² Legge, James. *A Record of Buddhist Kingdoms*. 102.
⁴³ Dhammika, Ven. S. "Sri Pada—Buddhism's Most Sacred Mountain."
⁴⁴ マルコ・ポーロ『東方見聞録』213-6頁。
⁴⁵ "Adam's Peak: Its History." by The Living Heritage Trust.
⁴⁶ プトレマイオス『地理学』262-3頁。
⁴⁷ Dhammika, Ven. S. "Sri Pada—Buddhism's Most Sacred Mountain."
⁴⁸ 同上
⁴⁹ 同上
⁵⁰ 同上
⁵¹ イブン・バットゥータ『大旅行記6』4頁参照のこと。
⁵² イブン・バットゥータ『大旅行記6』299頁。
⁵³ Dhammika, Ven. S. "Sri Pada—Buddhism's Most Sacred Mountain."
⁵⁴ 豊島与志雄, 佐藤正彰, 渡辺一夫, 岡部正孝訳『千一夜物語5』344頁。
⁵⁵ 山中弘「宗教とツーリズム研究に向けて」17-8頁。
⁵⁶ Haviland, Charles. "French Tourists Guilty in Sri Lanka over Buddha Photos." *BBC NEWS, Colombo*.
⁵⁷ 寺戸順子「惜しめない旅：「傷病者の聖地」の魅力の在処」108頁。
⁵⁸ Google map. "Dalhousie, Sri Lanka hotel."

参 考 文 献

- イブン・バットゥータ (1997)『大旅行記2』(イブン・ジュザイ編, 家島訳) 平凡社
 —— (2001)『大旅行記6』(イブン・ジュザイ編, 家島彦一訳) 平凡社
 渋谷利雄 (1993)「スリランカの仏教とナショナリズム—ラトゥナブラのエザラ・ベラヘラ祭を中心に」田
 邊繁治編『実践宗教の人類学：上座部仏教の世界』京都大学出版会 pp. 291-326.
 鈴木正崇 (1995)「スリランカの聖地と巡礼—スリー・パーダを中心として」石井溥編『南アジア, 東南ア
 ジアにおける宗教, 儀礼, 社会—「正統」, ダルマの波及・形成と変容』東京外国語大学アジアアフリ
 カ言語文化研究所 pp. 173-203.
 寺戸順子 (2012)「惜しめない旅：「傷病者の聖地」の魅力の在処」山中弘編『宗教とツーリズム：聖なる
 ものの変容と持続』世界思想社 pp. 106-125.
 豊島与志雄, 佐藤正彰, 渡辺一夫, 岡部正孝訳 (1988)『千一夜物語5』岩波文庫 岩波書店
 ハインド, レベッカ (2010)『図説 聖地への旅』(植島啓司監訳) 原書房
 プトレマイオス (1986)『地理学』(中務哲郎訳) 東海大学出版会
 マルコ・ポーロ (2012)『東方見聞録』(月村辰雄・久保田勝一訳) 岩波書店
 山中弘 (2012)「宗教とツーリズム研究に向けて」山中弘編『宗教とツーリズム：聖なるものの変容と持続』
 世界思想社 pp. 3-30.

Web サイト

- “Adam’s Peak: Its History.” by The Living Heritage Trust. accessed 8/28/2023, <http://sripada.org/adams-peak-history.htm>
- Boyle, Richard. “Saman’s Realm.” accessed 8/28/2023, http://sripada.org/saman_boyle.htm
- Dhammika, Ven. S. “Sri Pada—Buddhism’s Most Sacred Mountain.” accessed 8/28/2023, <http://sripada.org/dhammika.htm>
- Google map. “Dalhousie, Sri Lanka hotel.” accessed 8/28/2023
- Haviland, Charles. “French Tourists Guilty in Sri Lanka over Buddha Photos.” *BBC NEWS, Colombo*. accessed 8/28/2023, <http://www.bbc.co.uk/news/world-asia-19325357>
- “Islamic Traditions of Adam’s Peak. First Footprint on Earth by Prophet Hazrat Adam.” by The Living Heritage Trust. accessed 8/28/2023, <http://sripada.org/haqqani.htm>
- Jayatilake, Rajika. “Sri Pada: Symbol of Inter-faith Harmony.” accessed 8/28/2023, <http://sripada.org/jayatilake.htm>
- Legge, James. *A Record of Buddhist Kingdoms. Being an Account by the Chinese Monk Fâ-Hien of His Travels in India and Ceylon, A.D. 399-414, in search of the Buddhist Books of Discipline*. 1886. Digitized by the University of Toronto. 2009. accessed 8/28/2023, <http://www.archive.org/stream/recordofbuddhist00fahsuoft#page/n9/mode/2up>
- lonely planet*. “Ten Places to Travel for a Higher Cause.” accessed 7/22/2012, <http://www.lonelyplanet.com/india/travel-tips-and-articles/76631>
- Nanayakkara, S. S. M. “Sri Pada: Sanctuary for All Faiths.” accessed 8/28/2023, <http://sripada.org/nanayakkara.htm>
- . “Visit of Alexander the Great to the Sacred Mount of Sri Pada: Fact or Fiction?” accessed 8/28/2023, <http://sripada.org/alexander.htm>
- Nasrani Foundation*. accessed 8/28/2023, <http://www.nasrani.org>
- Nitzsche, Goetz. “Visiting a God.” From *Serendib Magazine* Vol. 16 No. 3 May-June 1997. accessed 8/28/2023, <http://sripada.org/nitzsche.htm>
- Palihapitiya, P. G. G. “Sri Pada: An Historical Account.” accessed 8/28/2023, <http://sripada.org/palihapitiya.htm>
- Ratnasinghe, Aryadasa. “Sri Pada: Shrouded in Legend and History.” accessed 8/28/2023, <http://sripada.org/ratnasinghe.htm>
- Sri Pada or Adam’s Peak: Lanka’s Holy Mountain*. by The Living Heritage Trust. accessed 8/28/2023, http://sripada.org/holy_mountain.htm
- The Living Heritage Trust. accessed 8/28/2023, <http://livingheritage.org>